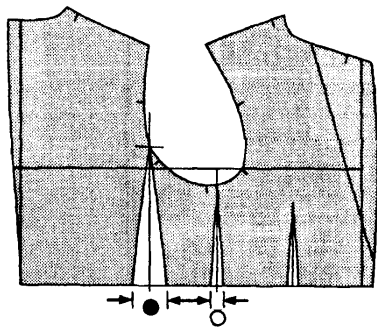
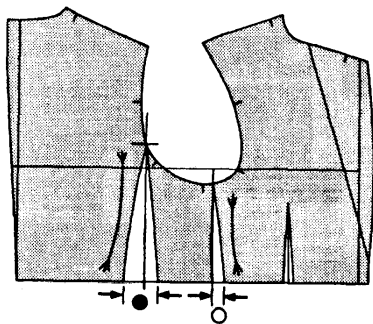
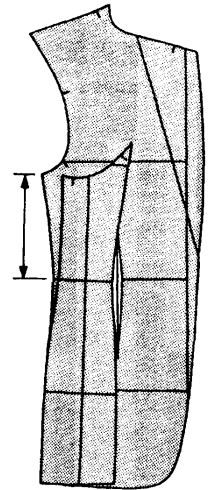
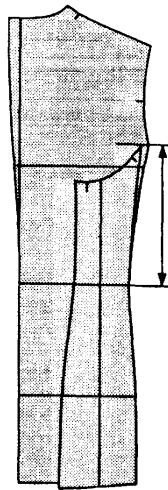


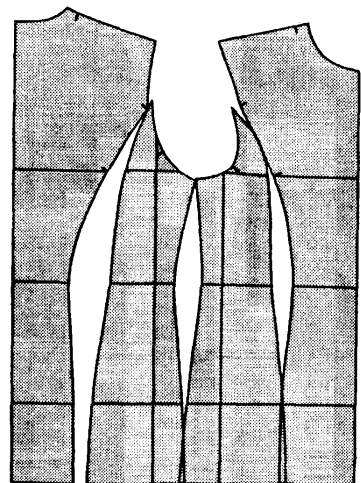
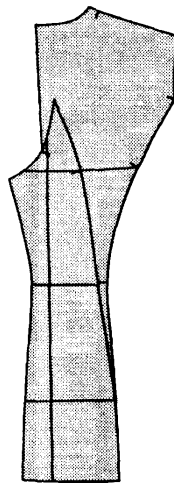
縫い合わせる線同士の性格をチェックする。異寸法箇所及び線の違いは、パターン構造の整合性に照らして修正の有無を決定。



水平線に直上する線に対し左右均等で同一の線分であれば異寸法は生じない。上記条件と異なり異寸法が生じる場合、イセ込みとすることが一般的な扱い。

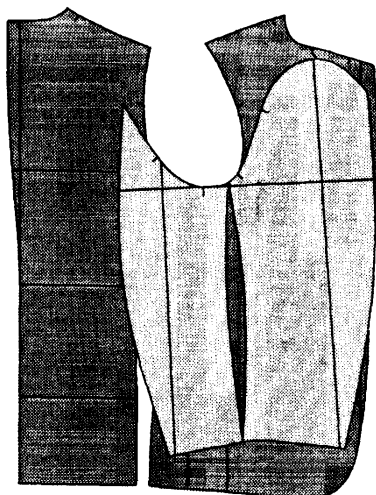


但し、右図のようなデザイン（パターン形状）の場合は、上記一般的な扱いでは処理不能。

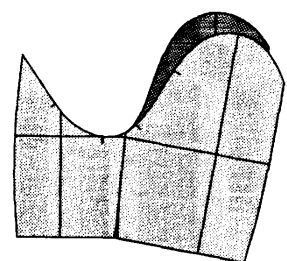
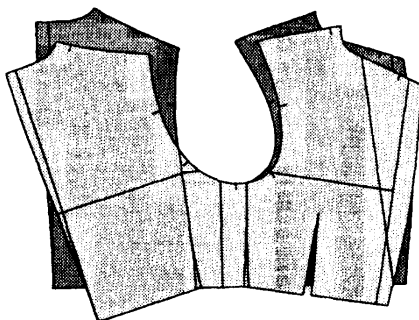


3 構造関係のチェック

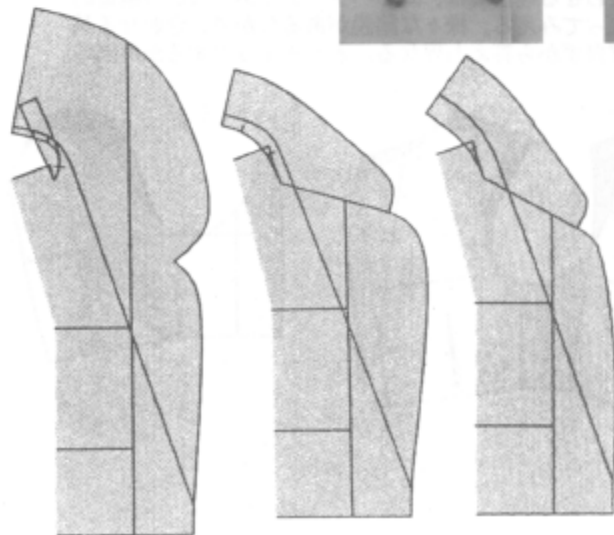
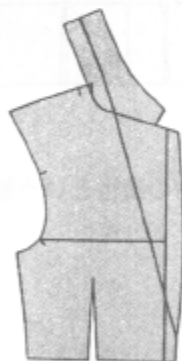
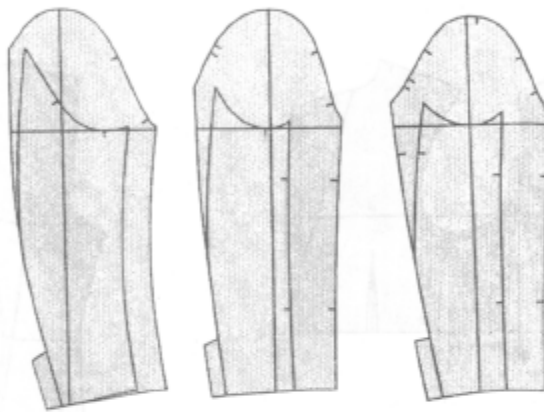
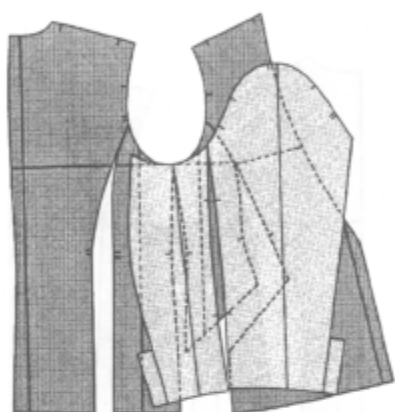
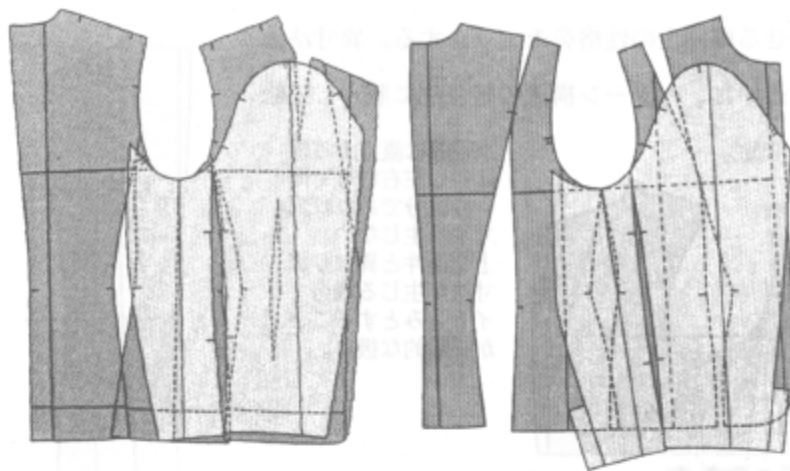
構造関係のチェックに関する問題点は前述しました。作ろうとする形に対しての構造の適否という観点でチェックします。この場合も、線の性格や寸法的内容の確認を含むことは当然です。



身頃や袖下の水平線を通して合わせる場合と、各縫い目を突き合わせて合わせる場合では、同じパターンでありながら構造的関係が異なってみえる。様々な諸説があるなかで、合わせる基準が違えば自ずから答えも異なる。どうチェックするかが問題。



デザインやパターンの考え方で身頃と袖も様々な関係が散見できる。袖筒も同様に外袖内側縫い目の伸ばしの有無や下袖側にイセを入れる等、様々な解釈や方法論があり作る形との整合性のみがチェックの基準となる。



衿の寝かし寸法や外回り寸法等の構造的関係もデザインによって様々に変化する。テーラーカラーのチェックと言う意味ではメンズの技術が参考になるものの、ここまでデザインが変化すれば同一の基準や方法論での検査は不自然であり、ここでも作ろうとする形との整合性のみが唯一チェックの基準となるが、パターンを一見しただけでは的確な内容の適否を判断することが困難なケースも多い。

VI パターンチェック不透明さの要因

パターンチェックという内容を、様々な角度から見てきました。しかし、これ程結論も不明瞭で敢えて言えば、結局は実態が不明であるとの答えが唯一の結論のようです。

何故、これ程不透明さが払拭できないのでしょうか。理由は様々に考えられますが、婦人服のパターンメイキングを中心とした技術は、目的とする形の範囲があまりにも膨大で、更に、パターンメイキングの結果適否の判断も、製品そのものの状態が明確な判定基準に成り得ないという二重苦にあるようです。

確かに、ジャケット一つとっても形のバリエーションは紳士服の比ではありません。紳士服の「背広」という定型的な衣服であれば、最終的に良好な形とは何か、その形を生み出すパターン形状はどうあるべきか、更に、そのパターンの縫製方法はと、ある一定の範囲内で判定基準が成立しているように思われます。もっとも、紳士服技術とて一枚岩ではない部分もあり、細部の技術論に入れば様々な意見や理論が並立していることも事実です。「背広」と言う大枠一律の形を作る上でも、微妙な違いが存在するわけですから、婦人服のジャケットにおいては、デザインとして一律の判定基準が確立し難いことも無理からぬことと思えます。

また、立体での確認という効果的な方法も、各自の技量や思い込みの差により的確な判定方法として機能していないことも一因でしょう。

更に、縫製工場の優劣等、同一のパターンを供給しても製品の顔や品質が異なり、工場パターンを修正した、しないの疑心暗鬼や過度の自信が、適切なパターンチェックの判断基準の確定を困難にしているようでもあります。

しかし、このように様々な要因を列挙するにつけ、その要因を生み、不明快な現状を醸成する真の原因が明確に浮上してくるのではないのでしょうか。

我々パターンメーカーは、あまりにもシーチングと紙の世界に留まりすぎることが、最大の要因のようです。立体で確認するといっても実際とは異なる条件（素材、ピン打ちという手法）だけで、最終的なパターンが生み出す形を希望的観測を根底に判断してはいないのでしょうか。工場でのパターン修正の有無を考えるより、自分のパターンを自分で縫ってみれば、そのパターンと言う設計図がどのような製品形状を生み出すか、一目瞭然であり、工場での対応云々という疑念が生じる余地は皆無ではないのでしょうか。

自分の作成したパターンが、最終どのような形になるかを知らないで、的確な結果確認が欠落したまま、作業として設計業務をこなし続ける現状こそ、すべての問題発生の根源であり、早急に改善されなければならない問題と思えてなりません。

自ら、自分の技術内容を検証することにより、パターンを中心とした技術上の不備や問題も鮮明になり、素材に対する対応や、工場生産での問題に理解が拡大していくと考えられます。婦人服ゆえの特性や困難さを前面に出して、標準化や判定基準確立の困難さを嘆くことは、何の解決にもならないとの前提で、目標を明確に経験を無駄にすることなく積み重ねることが重要です。この仕事においてはキャリアの長さが的確な技術を保証するとは断言できませんが、キャリアの不足は確実に技量や知識の不足に直結するはずで

企業としてもマニュアル化や標準化のみを念頭に、パターンメーカーの促成栽培を考えるべきではないでしょう。しかし、それ以上に我々パターンメーカー自身が技術者の育て方とはどうあるべきかを常に自問自答し、安易な判断や姿勢を極力排除しつつ、地道に実践することが重要ではないでしょうか。